

日本語が見えれば中国語も見える

胡 金 定

この題目を見たら、冗談だろうと言う方がいるでしょう。しかしこれは冗談ではない話です。本論を根気よく最後まで読んでいただければ、納得が行くだろうと筆者は自信をもって立論していきたいと思っています。本論はそれを立証するため、日本語と中国語との関係を、三つの内容に分けて対照比較研究の手法により、論旨を進めていきます。第一は「発音」、第二は「語彙」、第三は「表現」です。

近年、世界的に中国語学習ブームになっています。日本に於いても同じ現象が各分野で起きている。大学での一般語学教育には中国語を選択する学生が殺到しています。中国語の履修者は数の面では独語、仏語などをぬいて、英語に次ぐ位置にあると言われています。大学側は履修者急増に対応しきれず、定員制を設ける大学もあるようです。中国語担当教員が不足状態になっています。履修者急増の原因はいろいろあると思いますが、中国語選択の動機、学習の目的などを明らかにするため、『中国語』（内山書店1996年11月号）雑誌社が主催で関東地方を中心に国立大学・私立大学を無作為に選出して、「大学の中国語——アンケート調査報告」を実施しました。回答者は10大学、805名の学生です。内訳は、1) 中国語・中国文学専攻者223名（うち、55名は2年生）、2) 東洋史・中国哲学専攻者10名、3) 上記以外の文系の専攻者483名、4) 理系専攻者89名。これによりますと、中国語を選択した理由は次の順になっています（複数回答）。(1) 英語にかわる外国語を学習したい＝309名・38%、(2) 同じ漢字で親しみやすい＝294名・37%、(3) 中国旅行がしたい＝252名・31%、(4) 中国の悠久の歴史に関心がある＝202名・25%、(5) 隣国のことばだから＝172名・21%、(6) 就職に有利と考えて＝149名・19%、(7) 漢詩・漢文が好きだった＝132名・16%、(8) 先輩・友人にすすめられて＝110名・14%、(9) 親族にすすめられて＝92名・11%、(10) その他——これから発展する国だから＝66名・8%、(11) 中国に関するテレビドラマに感動して＝64名・8%、(12) 中国映画・音楽がすき＝61名・8%、(13) 特に理由はなく何となく＝47名・6%、(14) 中国武術に興味がある＝39名・5%、(15) 中国旅行をして感動した＝30名・4%。学習者の動機はさまざまですが、アンケートの(1)(2)(3)はそれぞれ三十パーセントを越えています。これを見ますと、中国語の重要性、日本と中国とは隣国で旅行しやすいこと、また、漢字を使用していますので、日本人学習者にとって勉強しやすいことなどが主要原因のようです。もうひとつの原因は大学入試の科目に指定されたことも無視できないと思います。1994年アメリカ大学進学者のための（進学適性考查「SAT」、中国語を外国語科目として採用したことや、日本の大学入試センター試験も平成9年度（1997年度）から外国語科目として加わることになっていることです。

しかし、本当に日本人にとって中国語が学習しやすい言語かどうかは認識する必要があります。確かにマザー・ランゲージ（母語）を日本語とする学習者に対して、中国語は漢字が使用されていますので、なじみやすい言語かもしりません。しかし、中国語は勉強しなくても筆談ができると思ったら大間違いです。よく日中両国は「同文同種」と言われますが、これは全く勘違いですので、言語体系から見ても違う言語体系です。

中国語は「孤立語」で、単語に語形変化がなく、文法的機能が語順によって表される言語です。「孤立語」は中国語の外に、「チベット語」、「タイ語」、「ベトナム語」、「ビルマ語」もそうです。

日本語は「膠着語（付着語）」です。「膠着語」というのは、文法的働きを示す接辞（てにをは）が単語にゆるく接合し、その切れ目がかなり明確な言語です。「膠着語」の代表的な言語は日本語で、「フィンランド語」、「トルコ語」、「朝鮮語」、「蒙古語」、「満州語」もこの類に入ります。

また、英語は「屈折語」で、語形全体や語尾の変化によって文法的に働きを表わすような種類の言語です。「屈折語」は英語の外に、「インド語」、「ヨーロッパ語」、「セム語」等の言語もあります。

上述のように、中国語が外国語だということは忘れてはいけません。その違いは沢山あると思いますが、漢字は日本人学習者にとってなじみやすい面もあれば、かえってやりにくい面もあります。同じ漢字ですけれども意味が全く違うか、一部分異なるかについての難しさは英語学習者にとっては経験のできない難しい問題です。例えば、「愛人」という単語は、日本語では配偶者以外の人を指しますが、中国語では [ài rén] と発音し、配偶者をさします。また、「手紙」は、日本語ではレターという意味ですが、中国語では [shǒu zhǐ] と発音し、「トイレレットペーパー」という想像のつかない意味です。このように中国語は勉強しやすいように見えますが、実際は結構難しいのです。筆談などはかなり危険です。

一、発 音

中国語の発音（表音字母、つまりピンイン、1958年1月中国政府が「文字改革委員会」を設置して、三つの任務を与えました。① 漢字の簡略化、② 普通話（共通語）の普及、③ 中国語ローマ字表音方式の制定と実施です。この委員会は1986年に名称を変更して、「国家言語文字工作委员会」にし、機関紙《語文建設》を出版しています。日本語で言えば、ローマ字綴りということです。）は日本語の発音とかなり違うのです。中国語の発音には、「子音」に当たる「声母」があり、「母音」に当たる「韻母」があります。「声母」は21個で、「韻母」は36個です。全部で合わせて57個の発音になります。その中に、「子音」に当たる「声母」には、「唇音」は4個、「舌尖音」は4個、「舌根音」は3個、「舌面音」は3個、「反り舌音」は4個、「舌歯音」は3個あります。「母音」に当たる「韻母」には、また「単母音」は6個、「反り舌母音」は1個、「二重母音」（複合母音）は9個、「三重母音」は4個、「鼻音つき母音」は16個あります。

日本語の発音には五十音図は46個、半濁音5個、濁音は25個（減ぢ、づ2個）23個、拗音は33個で、長音は5個、促音は1個、撥音は1個です。合わせて109個あります。しかし、日本語には中国語のように舌を巻いて発音する発音（反り舌音）はありません。割合と日本語の発音は簡単だと、わたしは思います。

中国語の発音には、日本語の発音にない発音がありますので、日本人の中国語学習者が苦勞するのです。日本人にとって難しい発音は主として次の四種類のものがあると思います。

一つ目は、舌を巻いて発音するもの、所謂「卷舌音（反り舌音）」[zh ch sh r] の四つです。

二つ目は、前鼻音と後（奥）鼻音のグループ（in ing en eng an ang）です。しかし、この類いの発音は日本語の中にもあります。例えば、「安心 あんしん、案内 あんない」は中国語の [an] に近いし、一方「行脚 あんぎゃ 案外 あんがい」は中国語の [ang] に近いです。

しかし、現代中国語の前鼻音と後（奥）鼻音に対して、日本語の漢字の音読みに、次のような対応関係が見られます。この規則を覚えれば、かえって発音しやすくなります。

中国語の前鼻音の [n] がついている言葉、例えば、「安眠あんみん (ān mián)」, 「安全 あんぜん (ān quán)」(漢 hàn, 念 niàn, 仁 rén, 新 xīn) の発音は日本語の音読みの場合では「ん」となりますが、後鼻音の場合は漢音、呉音とも日本語の漢字の音読みにしますと、長音となります。例えば、「英雄えいゆう (yīng xióng)」, (行 xíng, háng, 漢音では「こう」, 呉音では「ぎょう」), (江 jiāng, 「こう」, 冬 dōng 「とう」, 性 xìng 「せい」) のような中国語に [ng] のつく発音は、日本語の漢字音読みにする場合では「長音」になります。

三つ目は、無気音と有気音です。これは「子音」の中にあって、しかもペアになっています。例えば, [b p], [d t], [g k], [j q], [zh ch], [z c] 等です。無気音と有気音との違いがはっきり区別しなければ、意味が聞き取れない場合があります。

四つ目は、声調（四声）で、アクセントです。中国語の発音の中で、日本人にとって一番難しいのは何と言ってもこの声調（四声）の区別です。

音節についても、日中両語にもかなりの違いが見られます。中国語の音節は原則として一字の漢字は一音節になっています。ひとつの音節は基本的に「声母」と「韻母」の組み合わせにより構成されます。「声母」は単独で音節を構成することはありえません。しかし、「韻母」は「声母」がなくても音節を構成することができます。57個の中国語の基本的な発音（拼音）が単独或いは組み合わせにより構成する音節はなんと405個もあります。英語の音節は3500個以上あると言われているますが、日本語では実際に使用されている音節の種類は全部で350種類だと言われています。そうすると、中国語の音節は日本語の音節より遙かに多いことがわかります。

更に中国語の音節の「韻母」の中に「介音」, 「主母音」, 「韻尾」があります。かなり複雑になっています。

また、中国語の音節は、「声母」と「韻母」だけで成立できません。「声調（四声）」という（トーン）があります。ひとつの音節には四つの声調があります。しかも、声調と言葉の意味が密接な関係にあり、声調が違えば、意味が聞き取れません。ですから、中国語の声調（四

中国語の音節

字(拼音)	音 節				
	声 母	声 調			
		韻 母			
		介 音	主 母 音	韻 尾	
餓 e	無	無	e	無	第 4 声
安 an	無	無	a	n	第 1 声
牙 ya	無	i (y)	a	x	第 2 声
外 wai	無	u (w)	a	i	第 4 声
想 xiang	x	i	a	n g	第 3 声

声) は日本語のアクセントよりも重要です。中国語の声調を単純に計算すれば、 $405 \times 4 = 1620$ ですが、全ての音節には声調が全部そろっているわけではありません。実際に「声調」のあるのは1197あります。これは現在辞書に載っている数ですが。「児化」という音節とか「児化」に伴う母音の脱落とか、三声の声調が非三声の音節の前にある場合の声調変化とかがあります。これらを考えますと、実際の音節が辞典などに載っている数字よりも遙かに多いと思われます。

日本語の音節は原則として一つの仮名は一つ音節になっています。漢字読みで言いますと、一つの漢字は最低一音節になります。簡単に申し上げますと「1～UP」ということです。また、日本語のアクセントは一音節の場合、アクセントがありません。例えば、「田」(音読みでは「でん」、訓読みでは「た」)は、二音節の場合「でん」のアクセントが「で」にあり、一方一音節の場合「た」のアクセントが存在していません(日本語のアクセントは、三省堂の『新明解国語辞典』によるものです)。しかし、文になりますと、アクセントが発生するわけです。言い換えれば、後ろに「てにをは」などのような助詞が来ますと、アクセントが発生するので。日本語の発音のもうひとつの特徴は第一音節と第二音節のアクセントが違います。アクセントは第一音節にあれば、第二音節にはアクセントがないということになります。日本語のアクセントは個別な例を除いて、少々間違っても意味が取れますが、例えば「橋」,「端」,「箸」,「鼻」,「花」のような言葉以外は、意味が取れます。日本語は二つ以上の音節でなければ、アクセントが発生しません。つまり、日本語のアクセントは「はし」の例のように、あくまでも二音節またはそれ以上の音節の間にまたがる高低タイプのアクセントです。

一方、中国語のアクセント(四声)も高低タイプですが、中国語では一音節の中の高低変化です。つまり、一つの音節の中に四つのアクセント(声調)があるのです。しかも、アクセントと意味が密接な関係にあり、アクセントが間違ったら、意味が取れなくなります。例えば、「媽 mā, 「麻 má, 「馬 mǎ, 「罵 mà」のように声調の区別ができなければ、意味が取れなくなります。例えば、「媽媽 騎 馬, 馬 慢, 媽媽 罵 馬」(mā ma qí mǎ, mǎ màn, mā ma mà mǎ)を正しく発音すれば「お母さんが馬に乗る, 馬が鈍い, お母さんが馬を罵る」という意味になりますが、発音が間違えたら、違う意味になってしまいます。

二、語彙

中国国家教育委員会（文部省に当たる）1988年公布した『現代漢語常用字表』によりますと、中国語の常用漢字は2500字ですが、日本語の常用漢字は1945字です。中国は日本の1.3倍です。1990年中国で出版されている『漢語大辞典』に収録されている漢字は55000字ですが。常用漢字はわずか2500字です。2500字の中国語の漢字のうち字体は日本語の常用漢字と同じのは約60%を占めています。残りの40%は異なっています。異なっている数は約1000字です。しかし、中国語の中には、「簡体字」という略字があります。1988年に公布された『簡化字総表』によりますと、現在実施している略字は2238字です。

日本人の学習者にとってうっかりすると誤解しやすい語彙には、日中両国で同じ漢字を使いながら、意味が違ふ漢字語彙です。いわゆる同形異義語です。

例えば、「愛人（奥さん、ご主人）」、「丈夫（夫）」、「娘（お母さん）」、「東西（方向と品物）」、「切手（手を切る）」、「野菜（山菜）」、「老婆（女房、妻）」、「小心（気をつける）」、「着用（役に立つ）」、「対象（フィアンセ）」、「大家（みんな）」、「勉強（無理）」、「新聞（ニュース）」、「汽車（自動車）」、「一定（必ず、きっと）」、「百姓（一般大衆）」、「同行（同業者）」、「顔色（色）」、「便宜（値が安い）」、「湯（スープ）」、「出口（輸出）」、「汽車（トラック、自動車）」などの言葉です。更に例文を見てください。

1. 中国語学習者の中には、「私は卵が好きです」を、中国語で「我好卵」という人がいます。中国人はこれを読んで思わずに笑ってしまいます。中国語では「我愛（喜歡）吃蛋」と言わなければなりません。（中国語の「卵」は一字だけでは使用しませんが。使用するならば、意味は「卵子」（生物学用語）のことをさします。）
2. 汽車。（中国語では「火の車」）、宮部みゆきの『火車』という小説をはっと見たら、中国人は汽車の本と思っても、カードローン地獄に陥って家計が「火の車」になった人を扱った小説とはとても理解できません。
3. 中国語の「去（行く）」、「想（欲しい）」、「会（できる）」、「喜歡（好き）」という動詞は日本人の皆さんにとっては戸惑ってしまうでしょう。

例えば、「我想去日本」（私は日本を去ると思う）と理解したら、大きな間違いです。「私は日本に行きたい」という意味ですので、注意しなければなりません。

4. 「毎度有難。御馳走様」（中国語では「度々災難がある。早く逃げるように」）。正しい中国語表現は「承蒙款待，謝謝」。
5. 中国人は「油断一秒，怪我一生」というスローガンを読んだらびっくりします。「油を一秒でもきらしたら，私を一生咎めてもいい」という意味になります。

日中両語の語彙が前後転倒の言葉もかなり多く見られます。同じ文字を使って、同じ意味だが、語順が前後転倒するものです。例えば、「狂熱（熱狂）」、「界限（限界）」、「変黄（黄変）」、「才学（学才）」、「日期（期日）」、「介紹（紹介）」、「買売（売買）」、「会面（面会）」、「和平（平和）」、「黑白（白黒）」、「弟兄（兄弟）」、「偵探（探偵）」、「朴素（素朴）」などは最も典型的な

ものです。

また、日中両国の言語習慣や言語環境の違いにより省略語の方法も違ってきます。次ぎは簡略化した語彙について説明していきたいと思います。

「北大」は日本では誰でも分かるように「北海道大学」からの略語です。しかし、中国語で「北大」と言えば、「北京大学」のことを指します。また、「四川大学」は「川大」にしています。中国語の「高校」は「高等学校」ではなく、大学や大学院の「高等教育機関」をさします。「地下鉄」は中国語では「地铁」と言います。

一般的に、日本語では略語と言え、名詞的な連語を簡略化したものを思い出しますが、例えば、「大卒」、「高三」、「時短」、「労組」、「国連」のような使い慣れている単語ですが、中国語における略語は名詞的な連語だけにとどまらず、動詞などの用言も含まれます。例えば、「調査研究」を（調研）といい、「調整工資」を〔調資〕に簡略化しています。意味は賃金を調整することです。

日本語の漢字はもちろん、語彙そのものも中国語（古典）から来たものが多いのですが、中国語の二字語そのまま受け入れたものを例としていくつか挙げましょう。例えば、「葡萄」、「算盤」、「暖簾」、「椅子」、「帽子」、「厨房」、「茄子」、「屏風」、「高粱」、「鸚哥」、「冬瓜」、「白菜」、「胡麻」、「醬油」、「灯籠」、「面子」、「電腦」、「公司」などの言葉は二字語として日本語に吸収されてすっかり日本語になってしまったものです。

日本と中国は2千年近くの往来の歴史があり、日中両語の語彙の面においても相互に少なからず影響しあっている現象が見られます。明治維新までの長い間、日本は中国から多くの漢語を輸入し、日本語として定着させてきました。一方、明治維新を経た日本は、西欧の科学技術や社会制度に接し、数多くの意識による日本語の漢字語彙をつくりましたが、これらの語彙は清代末期から民国初期に留学生の手により中国に日本語の漢字語彙そのまま逆輸入されて使い始めました。それが、その後定着し、いわゆる日本語から中国語になったものも少なくありません。それらの言葉は現在でも中国人は抵抗なく使われています。例えば、「哲学」、「革命」、「倶楽部」、「任命」、「消費」、「主義」、「生産」、「想像」、「政党」、「経済」、「場合」、「資本」、「意識」、「場所」、「象徴」、「必要」、「基地」、「芸術」、「物質」、「動員」、「電報」、「電車」、「基督教」、「胃潰瘍」、「作品」、「労働者」などの語彙だけではなく、日本で組み合わせた言葉も中国に伝わって現在も使っているものもあります。例えば、「取り消し」、「手続き」、「柔道」、「茶道」、「相撲」、「空手」等、枚挙すれば、きりがありません。

このような傾向は現在にあり、また、語彙は単語だけにとどまらず、文の表現としても多くあります。例えば、「はじめまして、どうぞよろしく」（初次見面、請多多关照）は、日本語の挨拶用語として広く知られています。これはここ数年日本の映画やテレビドラマなどの台詞を中国語に翻訳してすっかり公民権を獲得しているものです。

日本人が漢字を使いながら日本の特有なものを表現しようと思う際、既成漢字がありませんので、漢字の法則により「和製漢字」（国字）を作りました。和製漢字は文字通り日本で作られた漢字ですので、中国にはもともとは存在していません。これらの和製漢字に対して中国人

は次のように発音をつけています。

1. 「畑 (田 tián)」, 「辻 (十 shí)」, 「風 (止 zhǐ)」, 「榊 (神 shén)」等は漢字の中の一部の漢字を取って読みます。2. 「粧 (米+花 mǐ huā)」, 「あさみ (麻美 má měi)」, 「ユミ (優美 yóu měi)」のように漢字に直して読む手法もあります。3. 日本人の名前を全部中国読みにするのです。その替わりに, 中国人の名前は日本語の漢字の「音読」で読んでいい訳です。

日中両語の外来語の訳し方もかなり違うのです。中国語は外国の言葉を受けにくい言語だとよく言われます。しかし, よく研究してみると, そうでもないことが分かって来ます。中国は漢の時代から, 中央アジアと頻繁に交流してきました。そのときにできた言葉としては, 「葡萄 (ぶどう) pó tao」, 「石榴 (ざくろ) shí liǔ」, 「獅子 (しし) shī zi」, 「琥珀 (こはく) hǔ pò」等があります。これらの言葉は音訳による訳語です。また, 意識の言葉もかなりあります。例えば, 元来ある言葉の前に「胡」という漢字を付けます。「胡」という漢字は「外来」という意味ですが。例えば, 「胡桃 (くるみ) hú táo」, 「胡葱 (ねぎ) hú cōng」, 「胡麻 (ごま) hú mā」, 「胡瓜 (きゅうり) hú guā」, 「胡床 (こしょう) hú chuáng」, 「胡琴 (こきん) hú qín」などです。「胡瓜」と「胡床」は現在「黄瓜」と「交椅」にかえて使っていますが。このようにすっかり中国語化され, だれでも「外来語」という意識をしなくなりました。

印度の仏教文化が中国に大きな影響をあたえました。言葉の面においても, 多くの宗教用語が見られます。例えば, 「和尚」, 「佛」, 「塔」, 「世界」, 「平等」, 「実際」, 「絶対」等はそうです。

一八四八年以後, 西洋文化と日本文化が中国に入り, いわゆる「西学東進」です。この時期も沢山の外来語が中国語の中に入りました。この時期の訳語の特徴としては音訳が主流でした。例えば, 「テレホン」を「德律風」, 「マイク」を「麦克風」, 「ビタミン」を「維他命」, 「ソファ」を「沙發」, 「コーヒー」を「咖啡」, 「タンク」を「坦克」, 「チョコレート」を「巧克力」, 「サンドイッチ」を「三明治」に訳していました。現在もかなり音訳が残っていますが, かなりの音訳借用語の後ろに名詞を付け加えて, あか抜けた中国語になりました。例えば, 「沙發椅」, 「咖啡茶」, 「坦克車」, 「巧克力糖」などです。

中国語の外来語の訳し方は音訳から意識に変化して来ました。例は次ぎにあります。例えば, ロシア語「布吉拉」(ワンピース)という言葉が一時期流行っていましたが, 現在その姿が完全に消えました。現在は「連衣裙」(ワンピース)といい, 中国語化されました。また, 音訳+意識の例としては, 「レーザー (萊塞光)」を「激光」に訳しました。

日本語から来た外来語もかなりあります。これらの外来語は次ぎの四種類に分けることができます。① 日本人が古典中国語の語彙を借りて, 古典中国語の意味を無くして, 意識で欧米の言葉の翻訳をしたもの。新たに中国語になったのです。例えば, 「文化」, 「博士」, 「法律」, 「経済」, 「環境」等がそうです。② 日本人が漢字を組み合わせ, 新語として, 意識で欧米語を翻訳したもの。中国語が外来語として吸収したもの。例えば, 「馬鈴薯」, 「消防」, 「美術」, 「入場券」, 「法人」等です。③ 日本人が作った漢字が中国語になったもの。例えば, 「癌」, 「腺」等。④ 日本固有のものや概念を表したものを中国人が借用したもの。例えば, 「寿司」,

「榻榻米」,「化粧品」,「場合」等です。

しかし、現在訳語の主流は音訳です。例えば、「カラオケ」を「卡拉 OK」,「ディスコ」を「迪斯科」,「ケンタッキー」を「肯德基」,「コカ・コーラー」を「可口可乐」(音義融合タイプ),「サントリー」を「三得利」,「ミノルタ」を「美能達」,「カシオ」を「卡西欧」,「ナショナル」を「樂声」,「シャープ」を「声宝(夏普)」,「マツダ」を「馬自達」に訳すように、一種のハイカラーという感じがします。

三、表 現

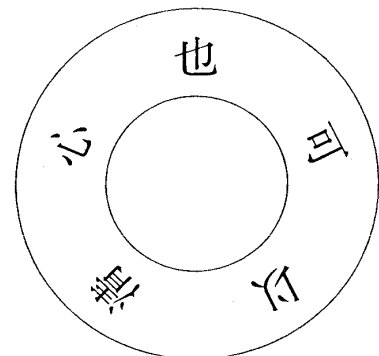
日本語の中にはさまざまな格助詞があって、それが体言の後ろについて、そのついた語が他の語に対してどんな資格関係に立つかがはっきり表現されますので、修飾語は必ず被修飾語の前に置くという規則を守っていれば、外の文の構成は、割合と語順が自由です。しかし、中国語は日本語のような格助詞がまったくなくて、主に語順によって語と語の間の資格関係を表していますので、語順が極めて重要で、語順を自由に変えることは困難です。次のような文を見てみましょう。

1. 「私がご飯を食べる」 ⇨ 「我吃飯」
2. 「ご飯を食べる、私が」 ⇨ 「飯吃我」
3. 「私が食べる、ご飯を」 ⇨ 「我吃、飯」
4. 「ご飯を、私が食べる」 ⇨ 「飯吃我」

また、いろいろな組み合わせができると思われますが、例文1～4までの日本語の構成は不自然な文もあるとは思いますが、一応話し言葉としては、意味疎通ができるはずです。これに対して、中国語は話し言葉としても、書き言葉としても「1」以外の例文は通用しないのです。上記の例文を見ても分かるように、日本語の助詞のようなものが全く存在していませんので、文の中の資格関係は語順により決められていくのです。中国語の語順は「主語+述語+目的語 (S+V+O)」で、日本語の語順は「主語+目的語+述語 (S+O+V)」です。例えば、「私は中国語を勉強する」は、中国語では「我學習漢語」と言います。「彼は私たちに日本語を教える」は、中国語では「他教我們日語」となります。

中国語にも自由に組み合わせることのできる表現がありますが、その場合意味が変わってしまうことが多いです。次の例文は特殊な例文だけれども、説明する為に見てみることにしましょう。この類いの文を「回文」といいます。これは遊びのようなもので、昔、急須に彫ってあったものです。お茶を楽しみながら、いろいろな想像をしてみらうのです。文は「可以清心也(心を清めることができる)」ですが、そこから展開して五つの意味が取れるようになるわけです。

- ① 可以清心也。(心を清めることができる)。
- ② 以清心也可。(これをもって心を清めてもいいよ)。
- ③ 清心也可以。(心を清めてもよろしい)。



④ 心也可以清。(心も清めることができる)。

⑤ 也可以清心。(心を清めることもできる)。

日本語には男と女の言葉がありますが、中国語には男と女の言葉の違いが原則として存在していません。ですから、小説を読むとき、主人公の人称代名詞が書かれるのが普通です。日本語には男と女の言葉の使い分けがありますので、主人公の人称代名詞を省略することが多く見られます。例えば、「あたし知らないわ」と言ったら、女性だと日本人の読者なら誰でもすぐ分かります。また、「おれ知らないぞ」と言ったら、男性だとも分かります。この二つの文を中国語に翻訳したら、みんな「我不知道」という表現になりますが、主人公は男か女かはっきり見分けることができません。ですから、日本語の小説を中国語に翻訳する際一番頭を痛めるのは、主人公が男か女かの問題です。

敬語の問題は日中両語もかなり違います。中国語には文法形式としての敬語が存在していません。例えば、「先生が午後お見えになる」と「先生が午後来る」とを、中国語に訳したら、両方とも「老師下午来」になります。文法形式としての敬語は存在しない中国語には単語単位としての敬語があります。例えば、「府上（お宅、ご家族）」、「令愛（御令嬢）」、「貴府（貴宅、お宅）」、「令尊大人（お父上）」などのようなものです。

中国語にはテンスを表す文法形式ありません。例えば、日本語の「今日は寒い」と「昨日は寒かった」を、中国語に翻訳しますと「今天很冷」と「昨天很冷」になります。どちらも「冷」で表現しているだけです。

外国人にとっては日本語の省略表現は最も難しいとされています。次のような例文をご覧ください。例文は俵万智『サラダ記念日』の一節を中国語に訳したものです。

「寒いね」と話しかければ、 「今天真冷啊！」

「寒いね」と答える人のいる 「是啊，真冷！」

あたたかさ。 有了這樣回答的人我感到了温暖。

日本語は非常に簡潔で纏まっていますが、中国語に訳しますと、「今天」とか「是啊」とか、時間名詞と応答の言葉を付け加えなければ、訳語としては分かりにくくなります。また、最後に締めくくる部分には、「這樣」という限定の言葉を使用していきます。さらに、「我感到」で、「あたたかさ」を感じる人を指摘しなければなりません。

例文をもうひとつ上げておきましょう。私は通勤の際よく利用している阪急電車駅構内にあるトイレにこんな紙を壁に張っています。

「ちょっとの注意でいつもきれいなみんなのトイレ」

この文には主語、述語が全く存在していません。典型的な日本語の省略文だといえるでしょう。これをそのまま中国語に翻訳したら、誰も理解しかねると思います。中国語に翻訳するならば、「注意衛生，人人有責」になるのです。

また、「すみません。甲南大学に行きたいのですが、……」という「……ですが」の省略文は、中国語では「同志，我想去甲南大学朝什麼方向走？」となります。この中国語を直訳しま

すと、「私は甲南大学に行きたいのです。それにここからどの方向に向かったらいいでしょうか」になります。

上述のように日本語と中国語とを比較すれば比較するほど日中両語とも分かるようになってきます。本論は「発音」、「語彙」、「表現」における日中両語の比較研究を行いました。敢えて「日本語が見えれば、中国語も見える」を論題にしました。

参 考 文 献

- | | | |
|-------------------------|------------|-------------------------|
| 1. 『中日大辞典』(増訂第二版) | 大修館書店 | 1994年5月1日出版 |
| 2. 『中国語』1996年11月号 | 内山書店 | 1996年10月15日出版 |
| 3. 『日中辞典』 | 小学館 | 1995年2月15日出版 |
| 4. 『中日辞典』 | 小学館 | 1992年1月1日出版 |
| 5. 『中⇄日翻訳表現文法』遠藤昭徳 | バベル・プレス | 1989年4月25日出版 |
| 6. 『中国語学習ハンドブック』相原茂編著 | 大修館書店 | 1994年6月20日出版 |
| 7. 『中国の文化と伝統』丁秀山 坂井田ひとみ | 金星堂 | 1996年1月21日出版 |
| 8. 『中国語と中国文化読本』趙金銘等 | 駿河台出版社 | 1992年4月1日出版 |
| 9. 『新明解国語辞典』(第三版) | 三省堂 | 1989年3月15日出版 |
| 10. 『広辞苑』(第四版) | 岩波書店 | 1991年11月15日
第四版第一刷発行 |
| 11. 『政策科学』(外国語教育研究特集号) | 立命館大学政府策学会 | 1995年3月20日発行 |